

工学博士竹島卓一君の「营造法式の研究」に対する授賞

審査要旨

营造法式は北宋の末期に李明仲（李誠）が勅命によって編修したところの、建築技術の知識を集大成した専門書である。竹島卓一君はこの書の伝承をたどり、仿宋重刊营造法式をもととして諸本の校勘を行った上で、法式の原文が建築学上どのように解釈されるかに重点を置いて研究を行い、中国建築史の基本的な問題を数多く解明している。同君の研究は三巻にまとめられ、第一巻は昭和四十五年、第二巻は昭和四十六年、第三巻は昭和四十七年に刊行された。

第一巻は、序説に続いて、第一章を総制として数学的・物理学的な記述や用語など一般的な問題を扱い、方位をただす取正、水平を決める定平、工事や運搬の手間を数えるための基礎事項、材料の基準寸法、釘の種類その他を説明している。第二章は土作と名づけて、建築の計画を地面に移して形状や範囲を決める立基、基礎や基壇を築く築基、土城の築成、築地や土塀の築造、流れに臨んで建築または橋脚を構築する場合の根伐、井戸の掘穿を取扱ひ、第三章は石作として、石材を造作する六段の階程と、仕上げた石材に彫飾を施す四種の手法を述べてのち、柱礎・角石・殿階基から石碑の一種笏頭碣こつとうけつにいたる二十二の項目について、石工の仕事を解説している。第四章は鋪作と題して、中国建築の特徴として発展した料栱、すなわち組物について詳細な記述を載せ、栱（肘木）・飛昂（尾榪おぼろぎその他）・爵頭（木鼻）・科（榭形）などの諸項目をわけて、多数の図を用いて説明を行っている。

第二巻には、まず第五章大木作があつて、建築の主要な構造部材に就いて記述し、梁^{はり}、闌額^{らんがく}すなわち日本で頭貫^{かしらぬき}とよばれる柱頭を横に連絡する貫材、柱、陽馬すなわち中国建築では屋根の形を決めるのに重要な役割をもつ隅木^{すみぎ}、侏儒柱^{しゆぢう}すなわち短かい柱の意味で日本でいう束^{つか}、棟すなわち棟木、搏風版^{はくふうばん}すなわち日本の「はふいた」、柵^{さく}すなわち料栱^{りょうこう}の最上部で母屋桁^{ははやへら}などを支える実肘木^{まじしゑ}、椽^{せん}、檐^{えん}、拵折^{せうせつ}すなわち屋根の立上りの寸法を決定する拵屋^{せうや}と屋根の流れに垂みをつける折屋、の諸項その他に就いて研究し、特に建物の側様を決定するのに大切な拵折^{せうせつ}については、二十余の図を描いて説明している。第六章の小木作は最も長編(六二七頁)で、大木作が建築の軸部を取扱う部門であつたのに対して、小木作の方は間仕切・建具・天井・床など、やや細部に属する諸施設を扱い、井亭子^{いぢやうし}などの独立した小建築や屋内に設けられる大規模な家具や厨子の如きものをも含み、日本でいえば大工・指物師の仕事のほか家具師・仏具師の扱う範圍にまで及んでいる。この章では総説として釘の使い方とその数、膠の用法について述べ、次いで版門すなわち日本でいう裏棧^{うしろせき}唐戸^{からかど}から、壁蔵^{かむら}すなわち大型の経棚に及ぶ四十二の項目が論じられており、中には法式の原文の内容が甚だ豊富な仏道帳なども含まれている。仏道帳は仏殿の内部に設けられる巨大な厨子で、間口は六〇尺を超えており、これを納める仏殿の壮大な規模が推測される。

第三巻では、第七章を彫木作と題して、彫物師の仕事、すなわち木材を以てする丸彫・半肉彫・平彫・透^透し彫などの手法と、彫刻の題材・用所に関する事項を扱っている。第八章旋作では、回転させながら加工する轆轤^{りくろ}細工をまとめて論じ、第九章鋸作では、原木を材に仕立てる木挽の仕事に就いて述べ、第十章竹作では、竹を材料とする工作の中で、屋根および壁の下地としての竹子舞^{たけこま}・竹垣^{たけかき}・竹の網^{たけあみ}・竹の敷物など、専ら建築に応用されるものを取扱つて

いる。第一章瓦作では、結瓦と題してとうが（丸瓦）・はんが（平瓦）を用いて行う屋根の葺き方と材料について述べ、次いで屋根の棟に瓦を高く積み上げる墨屋脊、正脊の両端にのせる棟飾としての鴟尾に関して叙述している。第二章泥作は、日本でいう左官の仕事で、泥・砂・漆喰などを使って壁体を構成し、壁面を仕上げる作業のほか、各種の竈とか、射梁（射的場）とか、庭園の中の山の作成なども包括している。第三章彩画作は、中国建築の特徴として重要な彩色を用いる装飾の仕事述べたもので、まず顔料の種類、調色の方法、塗り方を述べ、極彩色の装飾を意味する五彩偏装をはじめとして、色彩と文様とこれを施す建築の部分について説明している。第四章磚作では、磚すなわち煉瓦を用いる工事を取扱い、壁・牆の類や建物の基壇・階段・道路・傾斜道路の鋪装、水道、河を通す拱口（アーチ）、馬に乗る踏台になる馬台、家畜に飼料を給するための馬槽、井戸の築成に及んでいる。第五章窰作は広くは陶磁器を作成する仕事であるが、特に瓦と磚について、その種類と焼き方を述べ、更にこの作業を行うための窰そのものの築成方法を説明している。以上の营造法式研究の本文に続いて、著者は附録として原著者李明仲の序文や筋子・看詳・総釈を初め、仿宋本に加えられている李明仲の墓誌銘や後人の書加えた跋文・識語などの大量の文献を掲載している。

右三冊の内容は、便宜上配列順序の変更はあるが、法式の全文を掲げて句読を施し、和訳文を載せ、諸本の異字を註記し、これを解説しつつ研究の結果を述べる形となっている。今日伝わっている法式に附載された図様は法式の本文を理解する上に大切なものであるが、度々の伝写によって乱れ、真意不明となっているものが多いので、竹島君はこれを理解できるように描き改め、装飾文様・彫刻・絵様・削形以外の図を本文に合わせて作成し、多くの場合に石

印本にみられる旧来の図様と対比させている。本研究は前述のように、建築工事を分担するそれぞれの専門の部門によって区分されているが、何れの部分においても、法式の記載を用いて功限すなわち工作の手間を詳細に計算している。どのような作業のために、どれだけかの労働を必要としたかという計算の結果は、経済史の研究の上にも貴重な拠り所を提供したものである。

竹島君の研究は、法式の原文の解釈を主体としているが、そこには多年にわたる中国各地の現地調査の成果と朝鮮・日本の遺跡・遺構に関する豊富な知識が生かされている。本研究には著者の創見が頗る多く、また先人の研究を展させた点もみられる。例をあげれば、藻井を従来日本で格天井と考えていたのを改めて、その複雑な機構を説明した場合の如きは前者であり、曲水宴が日本の絵巻物などにみえる川の流れに沿った状況とは異り、流盃渠において行かう小規模なものであったことを、河南省登封県に残る北宋の崇福宮の泛觴亭や韓国慶州に残る新羅の鮑石亭の遺構と関係させて考察している如きは、故関野貞博士の説を發展させたもので後者に属している。竹島君はまた第三巻の末尾に三千三百余語に及ぶ用語解説を掲載しているが、これは研究の成果を取り入れた一種の用語辞典として広く研究者の手引をなしている。

竹島君の研究は中国建築史の基本的な諸問題を解明したものであり、また中国の影響を受けた日本・朝鮮・越南などの東アジア建築の史的研究のために重要な基礎を築いたものである。